

谷中村廃村

三 浦 頭 一 郎

- 一 はじめに
- 二 足尾鉍毒事件
- 三 谷中村廃村
- 四 北海道佐呂間町栃木地区
- 五 むすびにかえて

一 はじめに

足尾銅山の鉍毒事件については、「日本の公害の原点」という観点から論じられることが多い。しかし、足尾鉍毒事件というのは単なる鉍毒被害問題でなく、殖産興業の一環としての位置づけ、さらに政商古河市兵衛と結びついて顕在化した問題であつたことに留意する必要がある。^①足尾鉍毒事件が、殖産興業という国の政策と不可分に結びついた問題であつたがゆえに、その解決は谷中村の廃村という形に求められたのである。それゆえ、足尾銅山鉍毒事件については、

その鉱毒被害状況の精査という「公害の原点」の観点からの研究だけでなく、殖産興業政策の柱の一つとして、また重要な外貨獲得産業の一つとして、さらには日清・日露戦争を遂行するため兵器生産などに必要な戦略物資として産銅業を保護育成する国の政策との関連で足尾鉱毒事件を捉える視点が必要となるのである。ところで、そうした観点からの研究は、これまでもっぱら政府の行動を批判するという立場からなされてきた。しかし、足尾鉱毒事件の解決策としての谷中村の強制収用は、従来から指摘されているような政府の「悪意」のみで果たして可能であつたらうか。谷中村の強制収用は明治の末、すでに日露講和条約に反対する日比谷焼討事件があり、また東京市では都市民衆騒擾と呼ばれる政治社会運動が頻繁に起こり、やがては第一次憲政擁護運動が起ころうとする時代のことである。民衆の政府批判によって政治が動く、吉野作造の言う「民衆が政治上に於て一つの勢力として動くという傾向の流行する」時代のことであつた。それゆえ、谷中村廃村という政府が打ち出した鉱毒問題の解決策に対して世論の強い反対があれば、政府のもくろみは失敗するか、あるいは少なくとも難航したはずである。にもかかわらず、足尾鉱毒事件の解決策としての谷中村の強制収用が、村民の抵抗をもとめせず、いとも容易く行われたのは何故か。その解答は政府の「悪意」を指摘するだけの従来の研究によつては得られない。そこで本稿では、谷中村廃村をめぐる当時の県内世論について考えてみたい。

その際、本稿では、県内世論を考えるため素材として『下野新聞』を用いる。当時の世論を正確に再現することは不可能であるという史料制約から、栃木県下の有力紙『下野新聞』の議論を検討することを通して、当時の県内世論の一斑をうかがい知ろうと思うからである。しかしながら、当時、「地方紙の雄」を自称し得るほどの有力紙であつた『下野新聞』の議論は当時の県内世論の大勢とそれほど隔たつていなかったであらうと思われるし、また有力紙の議論は当時の県内世論をある程度まで方向付ける作用もしたと思われるから、この資料の選択はそれほど失当なものではな

かろうと考える。

ところで、足尾鉍毒事件は明治末の谷中村廃村に至って一段落したとされ、「この時期を一応の下限として設定することは許されるであろう^③」とされることが多い。しかし、足尾鉍毒事件を「日本の公害の原点」としてだけでなく、国の政策との関連で犠牲に供された谷中村の運命に注目するならば、谷中村廃村をもつて問題が解決したとは言えない。足尾鉍毒事件を単なる公害問題として見るならば、谷中村廃村は問題の一応の解決であり得るが（本当は鉍毒事件の解決にすらなっていないのであるが^④）、国の政策の犠牲に供された谷中村の運命に注目するならば、鉍毒事件が解決しようがしまいが、村民にはその後の人生を生きていかなければならないという課題が待っていたことに我々は思いを馳せざるを得ないからである。そこで本稿では、旧谷中村民の運命を象徴的に体现していると思われる一九一一（明治四四）年の北海道移民について考察する。谷中村強制収用から三年後、一九一〇（明治四三）年八月に関東一円を襲った大豪雨は、強制収用後も村周辺に仮小屋を建てて抵抗を続けてきた旧谷中村民に生活が立ち行かなくなる状況をもたらした。水害罹災民の救済策として内務省は北海道移住を奨励し、それに応じて旧谷中村民を含む栃木県下都賀郡南部の水害罹災民が北海道に移住した^⑤。彼らは北海道で最も開発の遅れていた北見国を移住先に指定され、そこで開拓に励み栃木部落を形成した。現在の北海道佐呂間町字栃木である。本稿では、栃木団体の北海道移住について、北海道で目にするこのできた未刊行の資料も用いながら明らかにしてみたい。^{*}

その前に、谷中村廃村に至るまでの足尾鉍毒事件の流れを、まず簡単に整理しておくことにする。

二 足尾鉍毒事件

足尾銅山は、幕末には廃山同様となっていたが、一八七七（明治十）年に古河市兵衛の経営に移ってから急速に近代化し、一八八四（明治十七）年には愛媛県の別子銅山を抜いて全国一の銅山となった。反面、古河の生産第一主義的な経営は、煙害と製錬用薪炭材の濫伐による足尾山林の荒廃を招いて大洪水を頻発させた。また大量の廃石や鉍滓、有毒重金属を含む酸性廃水を垂れ流した。そのため、一八八五（明治十八）年ごろから鮎の大量死や鮭の漁獲量の激減など渡良瀬川の漁業被害が顕在化するとともに、流域の農地と農作物に鉍毒被害が発生した。とくに一八九〇（明治二三）年八月の大洪水によって鉍毒被害が深刻化、稲作にも被害が出たため被害農民による鉍毒反対運動が開始された。十二月には長祐之が『下野新聞』に「足尾鉍毒に就て渡良瀬川沿岸の士民に訴ふ」を寄稿し「丹鑾」（鉍毒）の被害を訴えた。同じく十二月、栃木県吾妻村が知事に製銅所採掘停止を訴える上申を行い、これを嚆矢として鉍毒反対の陳情活動が展開された。栃木県と群馬県の両県議会も、知事に鉍毒対策を建議した。さらに翌一八九一（明治二四）年十二月の第二議会で田中正造が鉍毒質問を行い、それにより足尾鉍毒問題は全国に知れ渡った。⁶⁾

こうした動きに促されて栃木・群馬県当局は農商務省に被害調査を依頼、農商務省は東京帝国大学農科大学助教授長岡宗好に被害の原因調査を依頼した。⁷⁾それに農科大学助教授古在由直が協力し、長岡・古在の調査研究報告は「渡良瀬川沿岸被害原因調査に関する農科大学の報告書」として一八九二（明治二五）年に公表された。この長岡・古在報告は、農業被害の原因が足尾銅山の鉍毒にあることを明確に指摘したものである。これに対し、殖産興業政策の柱の一つであり、また重要な外貨獲得産業であった産銅業の保護育成をはかろうとしていた政府は、農科大学の調査報告書を発禁処

分にした上、田中正造の質問に対する答弁を回避し、その一方で古河と被害農民との間に示談を成立させた。この示談工作と日清戦争の勃発により反対運動は一時後退する⁸⁾。

ところが、一八九六（明治二九）年九月に未曾有の大洪水が発生し、鉱毒被害は栃木・群馬の二県から茨城・埼玉、さらには東京・千葉にも拡大したために鉱毒反対運動が再び高揚した。これを機に田中正造らは被害地の町村長や有志活動家を中心に鉱毒反対運動を再編強化、「対政府鉱業停止運動」として確立させた。翌年三月には六〇〇〇人（一説には一万二〇〇〇人ともいう）の農民が二回にわたって「東京押出し」（大挙上京請願運動）を繰り広げた。この事件により鉱毒問題は一大社会問題となり、その沈静化のため政府は第一次鉱毒調査会を設置、古河に対しては鉱毒予防工事命令を下し、被害農民に対しては免租処分を実施した⁹⁾。

しかし、予防工事が極めて不完全なものであったため鉱毒被害は後を絶たず、被害農民は鉱業停止などを求めて一九〇〇（明治三三）年二月に第四回の東京「押出し」を決行、「鉱毒被害惨状悲歌」¹⁰⁾を歌いながら東京を目指した。しかし、その途中の利根川河畔で警察に取り押さえられ、主要な活動家一〇〇余名が逮捕された（川俣事件）。事件後、運動は一時停滞したが、田中正造は被害民の運動を立て直すべく奔走、大弁護団を組織して公判闘争を展開した。

さらに田中正造は鉱毒問題の社会問題化による解決をはかるべく、一九〇一（明治三四）年十二月、衆議院議員を辞職して明治天皇に直訴、世論は沸騰し支援活動も広がった。十二月二十日には東京の学生たちが被害地を訪れ、翌年一月一日には東京市内で鉱毒被害状況報告演説会を開き、義捐金を募集した。この演説会には安部磯雄・加藤拙堂・木下尚江・田村直臣・内村鑑三らが参加して雄弁を振るい、聴衆は、

「怒髪立たざるはあらず、同胞救助の義捐を求めしに或る者は物品を投するあり、或は錢を投するあり、忽ちにし

て山の如き物品と四十余円を得たり」

という。在京新聞各社も被害民に同情的な立場から筆を取り始めた。^①

鉱毒被害民の直接行動である東京押出し、議会における田中正造の政府糾弾演説、川俣事件裁判での被害民の勝利、正造の直訴をきっかけにした鉱毒世論の高まりに対し、政府は一九〇二（明治三五）年一月に直属の「鉱毒調査委員会」（第二次鉱毒調査会）の設置を決定した。設置の趣旨は、足尾銅山などにおける鉱毒の状況と対応方法の検討であつた。委員会の討議では、足尾銅山の鉱業停止は初めから問題とならなかつた。日露開戦を目前に控えて、兵器生産などに必要な戦略物資として銅の増産が要請されていたからである。

調査委員会の報告書は一九〇三（明治三六）年三月二日に桂首相に提出され、五月の第十八帝国議会に「足尾銅山に關する鉱毒調査委員会報告書」として提出された。報告書は第一章から第四章までであるが、そこでは、足尾付近の森林荒廃・渡良瀬川沿岸の生産減殺・住民の衛生不良等の原因は鉱毒であるとする説に対し、調査した結果、被害の原因は森林に対する有毒ガスと渡良瀬川沿岸土壤中に存在する銅分であるとしている。前者の有毒ガスは鉱業上の作業から発生することは明瞭であるが、後者の銅分は果たして銅山の鉱業が原因かと疑問を呈して、「明治三十年予防命令以前二於ケル鉱業上ノ排出物」の「残留物」が大部分であると結論している。すなわち、作物に被害を与える銅分は一八九七（明治三十）年の鉱毒予防命令以前に銅山から排出されて銅山付近および渡良瀬川の河床に残留するものが大部分で、「足尾銅山現業に基因するは比較的小部分に過ぎざるを知る」として古河鉱業の責任を回避させ、渡良瀬川沿岸の農作物の被害は過去の蓄積された鉱毒が洪水によつて作物に冠水したためであるとして鉱毒事件の元凶を「洪水」にすり替えているのである。こうして鉱毒問題の解決は鉱業の在り方から治水問題へとすり替えられ、しかも治水問題の解決策

として「鉍毒激甚地……ヲ遊水池ト為シ置クヲ必要ト認ム」と鉍毒激甚地の遊水池化案が打ち出されるのである。^②

第二次鉍毒調査会の議事を記した「明治三十五年鉍毒調査委員会議事筆記（抄）」によれば、渡良瀬川の治水対策が論じられるのは十一月二五日の第八回からである。ここで、

「第一ノ方法ハ渡良瀬川ノ氾濫個所二堤防ヲ作り其水ヲ利根川ニ疎通スル事、即チ新川ヲ開鑿シテ利根ニ水ヲ落スコトナリ、第二ノ方法ハ渡良瀬川ノ沿岸ニ水溜ヲ作り以テ之ヲ利根川ニ流出スルコト」

と（一）河道改良・築堤案・（二）遊水池案の二案が出され、しかも（一）案は利根川改修計画に影響を与えるので（二）案にしなけねばならないとされた。さらに十一月二七日の第九回委員会で、渡良瀬川沿岸の治水は渡良瀬・利根および思川の三川が合流する付近に渡良瀬川の流量の一部を遊水させ、利根川の減水等待って徐々にこれを排水する遊水池を設けることが必要であるとした上で「谷中村へ流入スルノ計画ニテ設計スル」と谷中村を遊水池化する案が示された。そして、十二月二三日の第十二回委員会で、遊水池買収について「要スルニ治水上遊水池トシテ土地収用法ヲ適用シ、強制買収ノ方法ヲ取ルノ外ナキモノト思料ス」と強制買収による土地収用方法が決定された。^③

こうして、鉍毒に対する古河の企業責任は免罪され、渡良瀬川洪水の原因は洪水対策の不備・放置にあるという（鉍毒問題の治水問題へのすり替え）が主張され、それを解決するため一大遊水池の建設が計画され、下流域の谷中村がその標的とされた。ここで注目すべきことは、〈鉍毒問題の治水問題へのすり替え〉とその解決策としての谷中村強制買収という案が谷中村住民とそれ以外の地域の被害民とを分断したことである。鉍毒激甚地の多かつた渡良瀬川中・下流部の村々は国の遊水池設置案にほぼ賛成し、遊水池の適地は谷中村という認識で一致した。最下流部の谷中村は運動から切り離され、政府や県当局また足尾銅山側の思惑通り孤立した存在となった。^④

谷中村は村制施行により一八八九(明治二二)年四月一日、恵下野村・内野村・下宮村の三ヶ村が合併して成立した村である。渡良瀬川の北岸に位置し、周辺には赤麻沼・石川沼・板倉沼などが点在する低湿帯で、周辺の地域より一段と低い洪水常襲地帯であった。水害を受けやすい谷中村の周囲には輪中堤が築かれ、村を守ってきた。同時に、洪水によつて沃土が流入することで翌年は豊作に恵まれるという村でもあった。しかし、鉾毒事件が起こつてから自然の恵みは消え、水害と鉾毒とが襲う村となつていた。度重なる水害と鉾毒により谷中村の困窮化は進み、一八九五(明治二八)年には戸数三八〇戸のうち約半数が公民権停止となつていた。加えて谷中村民には、一八九四(明治二七)年に村が元下都賀郡長安生順四郎の計画に乗つて購入した排水器に絡む村債問題が重くのしかかつていた。¹⁵⁾

さて、第二次鉾毒調査委員会は、足尾鉾毒問題の解決策として、谷中村の遊水池化方針を打ち出した。政府の意を受けた栃木県(渡良瀬川は国の直轄河川でないため遊水池予定地の買収は栃木県が担当、国がそれに補助を出すことになつていた)は、本格的に谷中村の買収に乗り出すことになる。それまでも、第二次鉾毒調査会が審議中の一九〇二(明治三五)年に早くも渡部惟幾知事が谷中村買収案を県会に提出しようとしたが失敗、その後を継いだ菅井誠美知事も翌一九〇三(明治三六)年の第五回臨時県会に、明治三五年度追加予算として臨時土木費治水堤防費修築費思川の部に谷中村遊水池費三八万余円を提出し、県会がこれを否決するというのが起こつていた。白仁武知事は、これまで歴代知事の失敗を踏まえて、一九〇四(明治三七)年十一月一日から始まつた第八回通常県会の最終日に「臨時土木費治水堤防費」の名目で谷中村買収案を上程した。しかも知事は上程に先立つて憲政本党の大門恒作(当時県会議員失格中)と密かに会談、谷中村買収案の県会可決につき尽力を依頼した。その頃、県会議員の間で花札賭博が流行していたが、大門はこの賭博場で県議員と接触し谷中村買収案通過の密約を結んだ。白仁知事は大門のために警察に手配りし、賭

博資金も提供していたという。さらに県会は秘密会とされ、警官に守られる中での採決という挙に出た。県会は概ね無風状態で、せいぜい下都賀郡寒川村選出の大久保源吾が谷中村買収案に反対し、これに鯉沼九八郎（下都賀郡稲葉村選出）・船田三四郎（下都賀郡豊田村）らが同意した程度で、鉱毒被害地である足利・安蘇両郡選出議員は発言しなかった。「臨時土木費治水堤防費」の名目で谷中村買収案は可決され、この中の三六万円と国庫補助金の十二万円とを合わせた四八万円が谷中村買収費となった。¹⁶

県会で谷中村買収案が可決されるとすぐ、県当局は谷中村買収に着手した。白仁知事は一九〇五（明治三八）年三月に告諭第二号で谷中村住民に対し、「将来の安寧福利を図る途は瀦水池設置を機とし適當の地に移住することのみ」であると述べ、谷中村買収の方針を正式に示した。翌一九〇六（明治三九）年四月には、白仁知事は谷中村を廃して藤岡町に合併する諮問案を谷中村々会にはかつたが、村会はこれを否決した。しかし、村会の否決にもかかわらず、知事は五月十一日の告示第一七六号「谷中村廃村の告示」によって、七月一日を以て谷中村を廃して藤岡町に合併することを告示した。この告示により谷中村は行政的には消滅した。¹⁷

廃村告示後、谷中村民に対する移住勧誘が積極的に行われ、県は谷中村民の古河町や藤岡町、さらには那須原野の開拓などを斡旋した。こうして約一四〇世帯・約一〇〇〇人いた谷中村民の多くが離散していった。その際、村債問題が大きな役割を果たした。一八九四年に購入した排水器は内水排出にほとんど役に立たない代物で、その購入に係わる借金だけが村民に残された。村民の弱点は県当局によつて巧みに利用され、村民は自宅や農地を遊水池用地・渡良瀬川改修用地として県に売り渡し、村外への移住が続出した。一方、買収に応じない村民に対する県からの圧力も強くなつていった。例えば、水害で壊された赤麻沼に面した堤防をわざと復旧せず、たまりかねて村民自身の手で村債を起こして

仮堤を築くと県が人夫を雇って壊し、その破壊費用を村民から徴収する、谷中村に残留すれば村税を課して財産を差し押さえるなどと脅迫する、若い娘だけの留守宅を訪問して脅迫する、麦を蒔いても刈り入れさせないと脅す、漁具を取り上げる、村民を警察署に召喚しては巡査や刑事等の居並ぶ前に引き据えて「買収に応ずるか、拘留に処せらるゝか、二者その一を選べ」と脅迫する、などといった行為が行われた。¹⁸⁾

こうした勧誘と圧力の結果、多くの村民が村を離れていった。それでも、一九〇七（明治四〇）年二月段階で、堤内二〇戸・堤外五〇余戸の村民が村にとどまっていたという。彼ら最後の残留民たちを強制的に退去させるため、一九〇七年六月二十九日、残留民家屋の強制破壊が行われるのである。¹⁹⁾

三 谷中村廃村

一九〇七（明治四十）年一月二十六日、政府は谷中村に対し土地収用法適用を認定する公告を出した。これは谷中村を強制買収しうることを意味する。これに基づき六月二十九日、谷中残留民家屋の強制破壊が行われた。六月二十九日段階で谷中村に残っていたのは堤内十六戸一一人と堤外三戸十五名の計十九戸であり、強制破壊は七月五日に終了した。こうして谷中村は実質的にも消滅した。

強制破壊後も周辺に仮小屋を建て闘争を続ける村民もいたが、それについては次節で論じることとし、本節では強制破壊そのものに関する『下野新聞』の記事および論説を見ることにしよう。ここで注目すべきことは、当時の『下野新

聞」の記事や論説を丁寧に通ることによって我々は、現在の我々が谷中村を論じる場合とは異なる当時の県内世論の存在を知ることができるといふことである。すなわち、谷中村問題をわが国における公害問題の原点としてのみ考える立場や、田中正造研究の一遇として正造の視点でのみ谷中村問題を捉える立場、あるいは若き日の荒畑寒村の情熱的な著作『谷中村滅亡史』の記述に引きずられて谷中村を考える立場とは異なる、当時の県内で論じられていた議論の一斑をうかがうことができるのである。そして、そうした当時の県内世論の一斑をうかがい知ることによって我々は、谷中村を廃村の余儀なきに至らしめたもう一つの要因、すなわち谷中村廃村が政府や県当局の悪意によるものであるという従来の諸研究によつて指摘されてきた事実に加えて、谷中村の廃村はそれだけでなく、政府や県当局の路線に進んで沿うとする県内世論の存在によつて促進されたものであるという、谷中村廃村のもう一つの要因を明らかにすることができるのである。

それまで足尾銅山鉍毒問題に関して被害民に同情的な立場で健筆を振るつてきた『下野新聞』は、第二次鉍毒調査会が（鉍毒問題の治水問題へのすり替え）の方向を打ち出し、そのために谷中村というスケープゴートを見出すと、いち早くその路線に乗つて治水問題の観点から谷中村廃村のやむなきを論じ始めた。『下野新聞』の議論によれば、谷中村は「水害地として年々少なからざる県費を支出し、破壊堤塘の修理を行へ、若くは新に土工を起して再び水害の難無からしめんとするも其努力や全く無効に帰」す村であつた。ここに見られるのは、県全体のためという立場から谷中村の存続を非効率とする議論である。この『下野新聞』社説はさらに、毎年のように水害にあう谷中村のためにこれまで県民が巨額の経費を負担してきたとし、しかもその効果がない以上、とるべき途は唯一つ「谷中村を買収して瀧水池と為

し、住民は夫々賠償金を交付し、特別の便宜を与へて他に移住せしむる事」であるとしている。ここでは谷中村の買収という政府の方針が、そもそも足尾銅山の鉱毒問題の解決として出されてきたものであることを無視して、もっぱら治水問題の観点からのみ谷中村買収のやむなきが論じられている。本来は、「瀦水池問題と、鉱毒問題とは、一にして二、二にして一、名においては異なりといへども、実においてはほとんど相同じ」²¹⁾であり、しかもそのことは当時の人々によつて明確に認識されていたにもかかわらずである。この社説はさらに続けて、谷中村買収が「法に従つて断行せられし」もので、「法規の命ずる所に随つて慎重に執行せらるる」ものであることを指摘し、村民が立ち退きを拒否するのは「頑迷不靈猶其態度を改めずして官権の命に抗」するもので「徒らに騒擾する」ことであると断罪し、「最後まで郷土に上りたる諸氏が無謀の挙を演ずるが如き事なからんを切に誠む」と、あたかも木下尚江のいう「法治宗信徒」のごとき立場から忠告している。²²⁾

この社説と同じ六月二二日付の記事「谷中村の最後」でも、『下野新聞』は、谷中村の廃村を「不可抗的最后」で「已むを得ざるなり」とし、鉱毒問題には触れることなく、谷中村強制収用の原因を「谷中村は年々の水害に繼ぐに水害を以てし国家の経済が到底之を限度無く救済する能はざる為め大局より打算して遂に之を一大瀦水池と為すの已むなきに至りし」と治水問題に帰し、しかもそれを大局の見地よりやむなきものとしている。また六月二三日付の社説「噫、我が谷中村」でも、水害地として久しく県民にとつて難問題であつた谷中村は「法令に準拠」して諸般の手續きを終了し、「既に我が栃木県の行政地図より削除され」たと論じ、鉱毒問題の治水問題へのすり替えと法治宗信徒的発言を繰り返している。²³⁾

六月二五日、谷中村民たちは集会し、

一、我等は谷中村に対し土地収用法を適用し土地物件の買収強制執行を為すを飽くまで県庁の不当残酷の処置なりと信ず

一、官吏が強暴の所為を以て臨まざる限りは断じて腕力に訴へ抵抗せざることを約す

との決議を行った。²⁴しかし、六月二七日付社説「谷中の処分や如何」は、「買収の事果して人道に反し治者の執るべき道にあらざしや否や等は今更ら議するも詮なし」ことで、「今は唯々法律命令に服従して立退を実行せざるべからざるの時機となれるもの」と村民に対し諦めるよう促し、「村民にして尚ほ悟るなく、頑として立退を肯ぜざらん」ならば、「残留民は国家の法律命令に服せざる不従順の民たるの謗を免れざる可し」であるとして、「吾人は呉々も残留村民の思ひを翻して従順に立退に着手し、法律命令に服従せざる不順の民たるの謗を受けざらん事を望む」と警告している。²⁵

また、『下野新聞』は強制破壊執行日の六月二十九日、「谷中村と堤防費」と題して、明治三十年以降に谷中村付近の堤防工事のみ支出した額は年平均二万二七四六円四二銭四厘、合計十八万一九七一円三九銭二厘であると報じている。この報道は県当局の発表をそのままに掲載したものであろうが、この時機にこうした報道を行うこと自体、谷中村の強制破壊を正当なものと県民に印象付けることに一役買うものであったことは言うまでもない。しかも県当局の示した数字は、村民自らが築いた堤防を破壊した上で脆弱な堤防に作り変え、その脆弱な堤防の修築を幾度も繰り返した結果の数字であるという、当時から知られていた事実に触れることなく報じられたのである。²⁶

こうして谷中村の強制収用が正当化され、それに抵抗する村民が「頑迷不靈」の存在とされる中、県当局による残留民家屋の強制破壊が始められ、至る所で悲劇的な光景が繰り返された。まず強制破壊初日の二十九日、佐山梅吉宅には主人の梅吉・その妻・二人の子供がおり、彼らは屋内に座して動かず「毀ば毀て、殺さば殺せ」と腰を据えていたが、危

険を感じた田中正造と木下尚江が慰撫して屋外へ連れ出し、家屋は破壊された。この日は他に小川長三郎・川島伊勢五郎らの家屋の破壊が行われた。²⁷⁾

強制破壊二日目の六月三十日、この日は茂呂松右衛門邸の破壊が行われた。この家には主人の松右衛門（六〇歳）・子息の岸松（三三歳）・嫁のキヤと四人の子どもがいたが、これから母屋が取り壊されようとする時、岸松は興奮のあまり衣服を脱いで暴れ出し、「これを殺せ殺せ、県のヤツら、コンナに多勢居やがつて男一匹位え殺せねえのか」と怒鳴りながら家の内外を駆け回り始めた。その様子を見て松右衛門も興奮し、「松右衛門は此家と一緒に死ぬんだ」と顔を朱に染め、動く気配を見せなかった。この光景を前に、流石に県の役人も巡査も破壊の人夫も手を下すことを躊躇したという。しかし警務部長に促されて家屋の強制破壊は進行了た。

この日は渡辺長輔宅の破壊も行われる予定であった。長輔宅には、主人の長輔（四五歳）・妻のタヘ（四二歳）・長男長太（十六歳）のほかに幼い女子二名と七一歳の老母と四一歳になる長輔の妹ツヤがいた。ツヤは一度は嫁いたが、嫁ぎ先の姑の虐待により精神に異常を来たし、兄長輔の世話になっていた。長輔は家屋破壊後の妹の処置を気に病み、いよいよ家が破壊されようすると、「己さえ死んで仕舞えば善いのだ」と叫びながら前庭に走り出した。この兄の悲嘆を見ているうちにツヤもまた興奮し、「顔色真青に、眉逆立ち、見るからに恐しき形相して、部屋の中なる掻巻、器物など、手に従て投げ出し、手の付け様もなき始末」となり、さらに老母も「己が力さへあれば、之を活かして置かねえがこう年をとつては殺す事さへも出来ねえ、何と云う因果だらう」と泣き出した。この光景に長輔の事情を知る村民はもちろん警官も県の役人も愁然として涙を吞み、渡辺長輔宅の破壊は翌日に延期となった。²⁸⁾

強制破壊三日目の七月一日は島田熊吉宅・島田政五郎宅・水野彦一宅の取り壊しが行われた。水野家では主人の彦一

が留守にしており、主人不在のまま家屋破壊が執り行われようとしたが、彦一の娘リウが「何うしても壊してはなりません」と抵抗し、警務長が説得に当たったが、リウは厳然と「私は此家の長女です。おつかさんが何と言つても、父の歸らぬ中は壊させません」と頑強に抵抗した。その毅然とした態度に村民も警官も「驚嘆禁止措かざりし」「人をして坐るに襟を正さしむ」ものがあつたという。彦一が帰宅して家を明け渡したが、この話を人から聞いて彦一は「眼に涙、頬に微笑を湛えた」という^⑩。

こうして強制破壊に伴う悲劇的光景が各地で繰り返され、破壊作業が思いのほか手間取る中、『下野新聞』は七月三日付で「急速に進行せよ」と題する社説を掲げ、次のように論じた。すなわち、すでに強制破壊の実行に着手しているのだから、「須からく其進行を急速にして悲酸の情景を諸人の心に刻み、衆人の目に触れしむる事の短かるべきを期すべ」きであり、「僅々十数戸廿余棟に過ぎざるの破壊に週日の長きに渉るが如きは、徒らに破壊の惨景を長く公衆の面前に演じて、其悲酸の感を人心に深刻するに過ぎざるの外、何等の利益なき」と。そもそも最初から強制破壊の正当化に努めてきた『下野新聞』によれば、残留民家屋の強制破壊は「余儀なき」ことで、残留民の家屋は速やかに破壊されなければならなかった。さもなくば「悲酸の情景を諸人の心に刻み、衆人の目に触れ」させ「破壊の情景を長く公衆の面前に演じて、其悲酸の感を人心に深刻」することになり、谷中村の強制破壊に対する批判の芽を育むことになりかねないと危惧されたのである^⑪。

このように谷中村の強制破壊を急ぐ『下野新聞』の論調は、一方では村民に抵抗を唆す田中正造に対する罵声となり、他方では強制破壊後も仮小屋を建てて抵抗を続けようとする残留民に対する侮蔑となる。例えば、正造の言動は「喧騒を極め」「熱罵を恣」にするもので、強制破壊の「執行の進捗を妨げんとするの虞れ」ある「奇劇」と報じられ、村民

の一部は「田中正造を棄て、顧りみざるに至り」「田中翁去一日島田熊吉の宅に赴き金三円借用を申込みて断らる」と戯画化され、³²「谷中村の最後に当るに至らしめたるは誰れなるか否誰なるかを問ふの要無し即ち堤防を築きて谷中村の復活を必ず為し得させん杯と唱へたる人の罪に帰せざる可らず」と断罪される。³³さらに「谷中村の裏面」と題する記事にいたっては、「元谷中村が廃村されし後法律上の効力無きに拘らず田中正造氏外社会主義の人々は……残留民より密かに土地の買収を為したり……彼等残留民は当初他に移転するの精神なりしも買主のため即ち田中翁其他社会主義者の掣肘を受け遂に今回の惨事を演出するに至りし」と、正造らによる谷中村の土地買上という事実無根の報道を行っている。³⁴

また、残留民に対する罵りと嘲りの言葉は聞くに忍びない。七月十七日付「谷中村滅亡小史(上)」は、谷中村村民を「其民は懶惰無智にして誠実に産業を営まず自から堤防を破壊して修築費を県に仰ぎ地元請負を望んで費用の半額以上を酒色に浪費せり」と罵り、残留民を「頑愚の村民」と規定している。七月十八日付「谷中村滅亡小史(下)」では、「彼等は元來懶民なるを以て尚懶怠の密に醉死せんが為め谷中村を立退かざるなり」と述べ、残留民が立ち退かないのは「祖先久恋の地たるのみの單純なる意志に非ず同地以外に去れば力行するも尚従來の如く懶惰の狀態の儘富裕に生活し能はざるを知れる」ためであるとしている。そして、村民が田中正造らの説得に耳を傾けたことについて「一部政客の政治論を目今に於て必ず近く行ひ得可しと迷信」したと批判し、「懶惰の夢破れず政治論の現実と相距る遠きに悟らず漫然同村をして滅亡せしめたるは谷中の村民が之をして速かならしめたるなり」とまで言い切っている。³⁵

その一方、県当局の行動は極めて親切で穩当なものとして描かれる。例えば、七月三日付の記事「残留民後悔す」では、「県庁の措置が頗る親切にして且飽まで工事を丁寧なるのみならず仮に雨露を凌ぐに足るべき小屋掛を為すに最も

適當なる接近の場所を定夫に赴く様され各自が保管運搬等なすべき荷物すら県庁の馬車にて持運遣等の便利を与られ」
 ていると報じ、七月四日付「破壊雜録」は、「県庁が特別の心配を以て……此過分なる恩典に浴し県当局の処置が斯ま
 でに切実懇到なりしに今更から感佩する者を出すに至るべし」と報じている。さらに七月四日付「五日目の谷中破壊」
 は、「着手の当時は如何なる乱暴をなすかと思ひ居るに反し頗る丁寧親切にして自分の品物を片付けるよりも数層倍の丁
 寧を以て取崩す事とて意外に思ひ取崩せし後有難うございましたと其丁寧に対する謝礼の挨拶をなす家さへ有たり然れ
 ば名義は破壊なれども実は取解といふべきを適當とすべきなり」と記している。³⁶

家屋の強制破壊後も仮小屋を建てて抵抗を続ける残留民に対し、『下野新聞』七月二七日付の記事「谷中残留民の現
 状」は、谷中残留民は「尚破壊後の小天地を唯一の樂土と頼み……難治の民たる謗を余所にして……夫婦親子の高枕は
 浮世の外の浮世」で「昨今は非常の大漁にて……鼓腹撃壤も吝ならず」と揶揄している。一九〇七（明治四〇）年八月、
 栃木県下を襲った大洪水に際しては、「骨が舍利になつても動かぬとか土を掴んでも退去せぬとか大層強がりて厄介村
 谷中に居りし田中正造以下の頑民も追に水塚に達する浸水には驚きしと見え一同避難して村内に影も止めざる由之を最
 後の諦めとして他に移住すれば可ならん」と論じている。³⁷

それから三年後、「他に移住すれば可ならん」との望みどおり、谷中村残留民たちは移住を余儀なくされる。

四 北海道佐呂間町栃木地区

一九一〇（明治四三）年八月、東海・関東・東北地方一帯を豪雨が襲い、各地に大洪水が発生し、四四万三〇〇〇戸が浸水した。栃木県も大量の雨に見舞われ、宇都宮での観測によればピーク時の午前三時から四時までの間の雨量は六一ミリに達し、十・十一日の合計は一八四ミリであったという。この豪雨は栃木県下各地に被害をもたらししたが、とりわけ「被害激甚地は下都賀郡南部及足利の一部と鬼怒那珂沿岸」で、周辺の大河川が氾濫したため大きな被害となった。³⁸中でも「下都賀郡谷中村付近は殆んど六里四方全部浸水し船上にて瞥見し得るものは僅に森林屋根堤塘の頂点一部のみ渡良瀬利根の堤防六ヶ所破潰し部屋生井赤麻藤岡野木等全部水中にあ」ったという。³⁹

各地で復旧作業が難航する中、床次竹次郎地方局長は、

「一般罹災民に対する内務省の希望として此際寧ろ内地の移住よりも断然北海道の新天地を開拓し永久の幸福を浴すべく北海移住を勧誘する方針なり……移住者に対しては一戸宛十町歩の未墾地を無代授与するは勿論移住費家屋建設費より向ふ一ヶ年間の衣食費に至る迄全部内務省より支給し特に団体移住者に対しては移住地に於て一村落を形成せしめ誘導開発の指導者をも設け個々別々の移住者には到底望むべからざる諸種の便宜をも与ふる筈」

との談話を発表した。⁴⁰

こうした内務省による北海道移住の勧誘と並んで、民間レベルでも、北海道における有力紙『北海タイムス』（北海道新聞の前身）記者の渡辺常次が自らの郷里の栃木県下都賀郡寒川村を訪れ、水害罹災民に対し北海道移住の勧誘を行っている。同年四月に吉屋雄一下都賀郡長一行が北海道を視察し、栃木県水害罹災民の移住先は北海道北見国常呂郡と決

定した。四月七日、旧谷中村民を含む下都賀郡南部水害罹災民からなる移民団一行は、小山駅から北海道移住の途に付いた。出発前には「移住者は老幼に至るまで途中何等不安の事なく目的地へ赴くを得べし」と報じられていたが、四月十八日付「移民一行消息」は「道路険悪頗る困難を極め……多分明日頃には無事到達すべし」と報じている。^①

栃木側の資料で水害罹災民の北海道移住について分かるのはこの程度である。そこで本節では、この間の経緯について北海道側の資料も用いて明らかにしていきたい。

北海道の側でも水害発生当時、本州の水害を移民誘致のチャンスと捉えていた。一九一〇年九月八日付『北海タイムス』社説「移民と内地水害」は、「本道移民の招来には、内地の水災の如き、無論喜ぶ可らざるも、丁度好もの、而して罹災民の禍福転回の指南たること、決して国家の些事にはあらざるなり」とし、「誠に本道開拓のためには僥倖」を得たものと論じている。^②

また、同日付の『北海タイムス』には、河島醇北海道庁長官の談話として、

「本道は開けたりと云ふも十勝を始とし天塩北見将亦釧路根室日高等尚ほ開拓す可きもの全道に半ばす天塩北見の如きは全く未着手未開墾と云ふも不可ならず、……交通の不便は今尚ほ塞かれたる富源にして亦た宝庫なり……今回の府県大風水害は是等の罹災民を本道に移し一は以て安住の地を与へ一は以て本道の開拓に資す可き格好の機会なり道庁は府県罹災民中団体移住を為す者に対し特に吏員を派出して便宜を与へ尚ほ最も有望なる地積を選定して之を貸付する方針なり」

と、水害を好機と移民を誘致する旨と天塩北見地方開拓の意向が報じられている。^③

内務省の方針とリンクしながら、北海道庁は罹災地への北海道移住の勧誘を始め、一府十八県に見舞いとともに罹災民の北海道移住に関し道庁はできるだけ便宜と保護に尽くす旨を通知した。^④ また、罹災民の北海道移住に向けて動いていたのは北海道庁だけではなかった。報道機関の『北海タイムス』紙も移民誘致に熱心で、具体的に行動を起こしていた。同紙の記者は内務省を訪れ、一木喜徳郎次官に対して「今日各府県水害罹災地の窮民に対し一戸当此先例に因り一戸当二百十五円の移住費を与へ汽車汽船等無賃と為し移住を奨励す」べきであると意見を具申し^⑤ている。

九月には床次地方局長が北海道を視察し、

「水害地から罹災民を誘導して本道に移住せしむることは災民救助の一助ともなり又本道移住招来の一端ともなるから一挙兩得の策である……移民奨励と云ふ事は国の方針で……内務省では年々五十万余万宛増加する人口の移植地は現時北海道が最も適当地であると観て居る……近時本道の実情が随分国民に普知されたかの如にはあるが府県地方に到ると中々□□で無い役員などのみ地方に巡回して誘説した丈けでは容易に移住招来の効が挙げぬ、夫れより以前から本道に移住し土地開墾に実験あり、道内成功者が郷里や其附近に到つて実況を説くことは頗る効果のあるものかと思はれる」

との談話を発表した。^⑥ すなわち、内務省では人口増加対策として北海道への移住を奨励しており、北海道への移移住を勧誘するには官庁の役人よりも、すでに北海道に移住し成功している先達者が郷里において勧誘に当たるのがよいとされ、また八月の床次談話にあつたように北海道移住には団体移住が望ましいとされていたのである。

北海道庁では、河島長官が各府県に対し北海道移住を勧誘する文書を発送するほか、また黒金事務官が各水害罹災地を訪れて移住の勧誘に当たっていた。その一方、道庁は新殖民地区画の実測を行い、明治四四年度に処分すべき植民地

を、石狩国二ヶ所・後志国七ヶ所・渡島国五ヶ所・胆振国十三ヶ所・十勝国二ヶ所・釧路国七ヶ所・北見国三六ヶ所・天塩国十六ヶ所の計一〇七ヶ所と定めた。^④中でも北見国が三六ヶ所と重点的に割り当てられていたことが注目される。

民間レベルでも、「北海道今後の開発は北見に在り」と道庁が盛んに移民誘致を図っていた北見地方の有志が在京新聞記者を同地方に招いて、北見の宣伝に努めていた。その視察結果を報じる中で、『時事新報』が「北見国内の精華と云ふ可き常呂紋別二郡」と記していることは当時そのような見方が一部でなされていたことを示して注目に値する。と同時に常呂・紋別地方は交通の便が極めて悪いということも指摘されている。

また、床次談話では「道内成功者が郷里や其附近に到つて実況を説くことは頗る効果のある」ものと奨励されていたが、もともと北海道への移民勧誘に熱心であつた『北海タイムス』でも、早速、記者の渡辺常次が一九二一（明治四四）年二月から三月にかけて郷里の栃木県を訪れて、移民の勧誘に当たつていた。渡辺はまず、堀口栃木県内務部長・吉屋下都賀郡長・田所栃木警察署長らと会談して同地での移民勧誘につき協力を依頼し、三月一日は午後二時から部屋村役場において水害罹災民に対し移住勧誘の講演を行った。当日の聴衆は一一〇余名で午後四時半に閉会した。翌二日は藤岡町寺院において移住の勧誘を行つてゐる。「北海道の状況と有望とに就いて了解せる所あり多分好果を奏するならん」と渡辺は伝えている。^⑤

移住に係わる費用の補助の件も具体化してきた。内務省では当初五万円を大蔵省に請求していたが、移住希望者が予想以上に多かつたために十万円を要求、大蔵省において査定の結果、六万円が支出されることとなつた。移住のための汽車賃も鉄道院で半額と決定した。^⑥

各団体の移住先も、

▲ 山梨県移住者は胆振国虻田郡ソーケソーマベツ原野

▲ 福島県移住者は同国同郡キモベツ或は同郡カシブ二原野

▲ 栃木県移住者は北見国常呂郡サルマベツ原野

▲ 埼玉県移住者は北見国常呂郡上クンネ原野

▲ 群馬県移住者は石狩国空知郡オシフリカ及北見国ボンキキン原野

▲ 秋田県移住者は北見国常呂郡上クンネツプ原野

▲ 茨城県移住者は北見国紋別郡上渚滑原野

と決まった。栃木団体の移住先は吉屋下都賀郡長が北海道を訪れて決定したもので、「来札之に決定したる」という。⁵⁰⁾

ところで、吉屋下都賀郡長は一九一一（明治四四）年四月に北海道を視察に訪れており、四月三日付の『下野新聞』には「北海道移住地の状況、頗る肥沃なる土地」と題して、

「今回、下都賀郡水害地移住民の移住すべき北海道北見国常呂郡の移住地は、吉屋郡長、鈴木農業技手を随え出張、実地を調査し二十九日帰県したるが、同地は内地にても容易に見るを得ざる程の肥沃の地にして、今日迄開発せられざりしは、交通の不便なりし為めなりと。なお同地はすでに一百戸以上の移住者出来、仮小屋を建設中にて村役場及び学校の敷地は二町五反歩と決定したる由」

と報じられているが、吉屋郡長が実際に移住地を視察したかは疑わしい。吉屋郡長の行動に疑問を持った小池喜孝氏の指摘によると、一〇〇戸以上が移住しているのは同地から三里も離れた他の部落であり、仮小屋は移民が現地に着いてから着手したものである。また吉屋郡長・鈴木技手の日程は、二三日に札幌着、二四日も札幌に宿泊して、二九日に宇

都宮着というものである。二九日に宇都宮に着くためには二七日夜には札幌を出発していなければならない。したがって二五日から二七日までの間にサロマベツ原野を視察していなければならないが、当時の交通事情では野付牛までが汽車で二日以上、ここから馬車でサロマベツまで一日かかる。計三日、往復で六日以上の旅程であるから、二人は現地調査をしていなかったと言わざるを得ない。³² 現地調査のため北海道を訪れた吉屋郡長は現地を視察しておらず、現地を視察しないまま、北見国常呂郡は「内地にても容易に見るを得ざる程の肥沃の地」であると栃木団体の移住先を北見国常呂郡サロマベツ原野と決めたのである。

栃木団体一行は四月七日小山発の列車で北海道移住の途についた。³³ 途中、青森―函館間の船が火事にあつたり、函館―札幌間の夜行列車が故障したり、池田―網走間の列車が脱線するなどしながら、ようやく野付牛まで辿り着いた。³⁴ そこからの行程について、移民団の責任者として付き添っていた足利市助役大貫権一郎の日記によれば、

四月一三日 早朝、野付牛発。……途中雪どけ。泥濘膝を没する程度に及ぶ。歩行困難。……留辺蕊、二尺以上の雪で泣き出す者、帰りたいといい出す人多数。

四月一四日 ……第四区留辺蕊より約三里は峠。一方山岳。一方溪谷。危険、困難想像外。融雪中の雪路歩行容易ならず。足跡あやまれば、二尺〜三尺の雪中に両脚没し、両股にて止まる状況。

（中略）

四月一六日 ……仮小屋三棟設けた。子どもも勾配につれて転下状態、啞然たり。小屋、雑木林を柱とする。……積雪二尺〜四尺以上。天然大木、天空を蔽う。……熊笹五尺〜六尺茂生して大熊の出没を感じさせる。

四月一七日 学校内に起臥。毛布、蒲団で身を囲うも寒気強く安眠出来ず。

四月一日 洗顔水、ほとんど水らんばかりの寒冷。頭髮を洗うも櫛を入れる時、すでに氷となる。

(中略)

四月二三日 早朝、引率者は関係書類を団体長に引渡し、移民に送られ万歳を三唱し別れる。

とある。⁽⁵⁵⁾「泣き出す者、帰りたいといい出す人多数」の中、大貫はここで帰ることができたが、移民たちの苦勞はこれからであつた。

栃木団体が移住したサロマベツ原野は「全く未着手未開墾と云ふも不可」ならない場所で「交通上の利便備はらざる化外の域」と評されていた。一九一〇(明治四三)年に北海道庁が作成した「北見国網走郡下常呂・サロマベツ殖民地増画図」によつて見ても、この地方は植民実測のための調査が入ったところでもほとんどが草地・笹地・潤葉樹林・針葉樹林であつたことが分かるし、調査が及ばない地域も未開の原野であつたと思われる。⁽⁵⁶⁾入植者たちはまず家族総出で着手小屋と呼ばれる掘立小屋を建て、それから辺り一面を覆う巨木と熊笹の処理に取り掛かつた。馬も機械も持たない入植者たちは、慣れない人力で一メートル以上の太さの木を切つていった。入植者たちのほとんどは栃木県では兼業農家で人跡未踏の地に入つて開拓するということは全くの素人であつた。また開墾のための道具といつても鋏・鎌・鋸ぐらいしか持たなかつたのであるから、その苦勞は並大抵のことではなかつた。倒木は適当な大きさに切つては焼いていつたが、一本を焼き終えるのに三十日はかかつたという。立木を始末した後は笹焼きであるが、焼け過ぎで跡地が煉瓦化しないように細心の注意を払つて焼くという作業を連日にわたつて繰り返し続けた。畑にするには余分なものを全て焼き払うより方法がなかつたのである。⁽⁵⁷⁾

食事に関しても、麦・馬鈴薯・南瓜・玉葱・蕎麦が主食で、米飯は盆や正月でなければ口にすることができなかつた

という。移民団の一人で当時六歳だった峯崎辰蔵氏は次のように回想している。すなわち、彼らは移民団の来住を待望していた北見で大変な歓迎を受けたが、この歓迎について峯崎氏は

「ここではじゃがいもといなぎびもちの接待を受けた。大きな鉄鍋で麦を煮ていたが内地では馬のえさであつたので、そうだとおもつていたところみんなにふるまわれたのでたまげてしまった。」

と述べている。また第二次移民団の一人で当時十二歳だった田中倫太郎氏は、

「たべ物にはおどろいた。こちとらは、東京さ奉公して、うまいもん食つてたから食えたもんでなかつた。一番うまいもんというのが、トーキビさ金時豆まぜて砂糖さ入れて、三平皿で食う。みんな『うめえ』と言つていたが、わつしは『馬さ食べせんのか』と思つた。」

と述べている。住居も粗末なもので、吹雪の夜は外から吹き込んだ雪が布団の上に二・三寸積もり、目が覚めて驚いたことも再三あつたといふ³⁸

こうした開拓の苦勞からであろう、第一次入植者の中から早くも一年目にして二十戸の離脱者が出た。その穴埋めのため一九一三（大正二）年四月、瀬下六右衛門（第一次北海道栃木開拓移民団々長）が栃木県にいったん帰県し、再び移住者を募つて総戸数三三戸の第二次北海道栃木開拓移民団を引率してきた。開拓の苦勞ゆえ、彼らの中からも二十戸の離脱者と八名の除名者が出たが、それでも残つた入植者たちは懸命に開拓を続けた。また栃木団体の入植と前後して、一九一四（明治四四）年の鈴木哲太（山形県）と高瀬市太郎（愛媛県）を皮切りに、相当数の入植者が他県から移住してきた。彼ら他県からの入植者については、入籍届けが提出されていなかったり、入籍しないまま他所へ転出したりする場合が多かつたため正確な動態は把握できないが、彼らもまた——栃木団体の入植者に比べて不利な条件下での入植

であつたにもかかわらず——懸命に開拓に従事した。⁽⁹⁾

こうした栃木団体や他県からの入植者たちの懸命の努力の結果、栃木部落は徐々にであるが発展してきた。一九一一年(明治四四)年四月二日には栃木神社が建立された。これは移住者たちが宇都宮に鎮座する二荒山神社の御分霊を拝受してきたことに始まる。一九一二(大正元)年には日光山多聞寺が移転された。これは栃木県下都賀郡報恩寺の住職林円諦が栃木地区に慰問に来たことが契機となつて、日光一山会議により多聞寺の移転が決定されたものである。一九一二年六月には、子弟の教育を憂慮した地区の有志によつて栃木神社拝殿に下佐呂間尋常小学校所属栃木教授所が開設されたが、その資金は全て地区住民の道路工事出役によつて得られた資金の醵金によるものである。栃木小学校沿革誌には、「当時部落道路開削に当り部落一同出役して其の賃金全部を築費に充てたるものなり」とある。施設は至つて粗末なもので、初代教員三浦喜四郎は、「吹雪の時は雪が教室へ吹き込むので学童はツマゴをはきネルのかぶりをかぶつたまま勉強したのであるが全国に何万もの小学校があつたでしょうがツマゴを脱がずかぶりをかぶつたまま教室で勉強する学校はなかつたのではないかと思います」と回想している。その後、児童数が急増したため一九一四(大正三)年に新校舎の建築が企てられ、一九一七(大正六)年九月十三日に開校式を挙げた。⁽¹⁰⁾

部落の人口も、大正年間には最高一六〇戸を数えた。栃木部落の戸数動態は、

年 号	移 住	転 出	現在数	部落全体
明治四四年	第一次六六戸	六六戸	六六戸	
明治四五年		二〇戸	四六戸	(大正年間に最高一六〇戸)

大正二年 第二次三三戸

七八戸

大正三年

二〇戸

五八戸

大正十三年

二一戸

三七戸

一一〇戸

(中略)

昭和三〇年

一一〇戸

である。⁽⁸³⁾しかし、栃木部落の人口は一九六〇（昭和三五）年前後を境に急激に減少する。それについての考察は戦後農政の貧困と農村の過疎化という本稿の課題とは別個の視点を要するものであるから別の機会に譲ることにするが、ただ本稿の主題との関連で触れておくならば、例えば移民二世の川島清氏（父は佐呂間町で栃木歌舞伎を興行して人気を博した川島平助氏）が、

「私たちは、物ずきで来たんじゃない。県の命令で来たんだ。金もうけのために来たんじゃない。そりゃあ、五町歩の土地をもらえんという夢もあつたろうが、鉅毒がなくなつたら帰れるということであつたんだ。だから、県の方には、帰らせろという請願書をおやじたちは三回も出している。」⁽⁸⁴⁾

と述べているような、移住当初からの〈騙された思い〉が、農村の過疎化という一般的傾向に加えて、栃木部落固有の要因としてこの地区の人口減少に拍車をかけたということである。この〈騙された思い〉は戦前・戦後を通して四回の帰郷運動となっており、昭和四六年には帰郷請願が認められて六戸の栃木出身者が母県へ帰っている。

五 むすびにかえて

本稿を終えるに当たって、私は田中正造の次の言葉を以て結びに代えたい。

「従来鉱毒問題ハ箇人の問題なりなぞと欺かれたるハ皆市兵衛派の郡長等の故意ニ欺きたるものニ候、……鉱毒問題ハ権利の問題、財産生命の問題・憲法法律の問題にして誠ニ国家社会の問題たる事を発明せられて、たとへ自分の所有地に損なくも即ち被害民なり、たとい自分の家に死人なくとも即ち人類の殺さるる問題たることを了解せられて已往の過失を悔て過ちを改むれハ足れり、過ちを改めて今より自ら生命権利財産を重んずれハ回復の道も相立ち可申候」^⑤

谷中村廃村をめぐる問題は、この田中正造の言葉に尽きるように思う。本稿で見てきたように、足尾鉱毒事件は、殖産興業政策の柱の一つとして、また重要な外貨獲得産業として、さらには兵器生産などに必要な戦略物資として産銅業の保護育成をはかろうとする政府の〈鉱毒問題の治水問題へのすり替え〉によって、谷中村の強制収用とその遊水池化という形で解決を見た。この政府が提示した解決策に、谷中村と同じように鉱毒被害激基地であった渡良瀬川中・下流域の村々はほぼ一致して賛成し、政府の思惑通り谷中村は孤立した。谷中村の買収を論じる県会でも、鉱毒被害地である足利・安蘇両郡選出議員は発言しなかった。谷中村の強制収用に際して、『下野新聞』は、谷中村の強制収用を県全体の立場から至当なものとし、また、それは法律に従って執行されるものであるから抵抗するのは「頑迷不靈」で「官権の命に抗」するものとした。そして、同村の廃村は「不可抗的」なものであるから「唯々法律命令に服従して立退を実行」すべきであると論じ、谷中村の廃村は「懶惰の夢破れ」ない村民自らが促進したものであると論じた。こうして谷

中村は、政府の標的にされただけでなく、近隣諸村から孤立し、さらには県内世論からも孤立させられた。政府による谷中村の強制収用がいつも容易く行われ得た背景には、こうした谷中村の孤立があった。谷中村の強制収用が、鉱毒問題の本当の解決ではなく（鉱毒問題の治水問題へのすり替え）に過ぎないものであったにもかかわらず、谷中村の廢村に対し村民とともに異を唱えようとするものは県内にほとんどいなかったのである。しかも、一九一〇（明治四三）年八月の大洪水により生活が立ち行かなくなつた旧谷中村残留民たちは、水害罹災民の救済策として・内地で増え続ける人口対策として・また北海道開拓の必要から北海道移住を奨励する国の政策に従つて北海道に渡り、そこで当初聞かされていたのとは違ふ開拓の現実を前に大変な苦勞を重ねた。谷中村の運命とそこに住む人々の人生は、まさしく国の政策とそれに加勢する世論に弄ばれたそれといえよう。

田中正造は当時、「古河市兵衛と一部地方農民の間に起きた小問題に深入りし、政治家として大成することを妨げた」「鉱毒の」ととき小さな問題にかかわつてゐる」と批判されたさうである。それに対して正造を擁護する立場から、「三十万の農民と四万町歩の被害は決して区々たる問題であるはずはなかつた」と言われたりする。しかし、谷中村廢村をめぐる県内世論の一斑を、『下野新聞』の議論を通して見てきた我々は、もはやそのようには考えない。正造にとつて農民の数や土地の大きさは問題でなかつたはずである。正造の目の前にあつたのは、我々が本稿で見てきたような「鉱毒問題ハ箇人の問題なり」としか考えない県内世論の存在であつた。だからこそ正造は、「たとへ自分の所有地に損なくも即ち被害民なり、たとい自分の家に死人なくとも即ち人類の殺さるる問題」であることを強調し、「鉱毒問題ハ權利の問題、財産生命の問題・憲法法律の問題にして誠ニ国家社会の問題」と絶叫しなければならなかつたのである。

翻つて現代の我々はどうであらうか。我々もまた、今現に日本のどこかにある谷中村問題を「箇人の問題」とのみ考

えていないだろうか。自分に損がなければ知らぬ存ぜぬで頼被りを決め込んでいないであろうか。「大局的見地からは致し方ののないこと」と、もつともらしい言い訳を口にしながら。しかし、国家を前にすれば、人は皆区々たる「箇人の問題」を生きているに過ぎない。今、日本のどこかの谷中村問題を「箇人の問題」と囁いているならば、やがて自分が国家の犠牲に供されようとする時、我々は孤立無援の戦いを強いられるであろう。谷中村の運命と村民たちのその後の人生は、自らの過失なしに犠牲だけを払いながら、現代の我々にそのことを伝えているように思われる。

※佐呂間町栃木地区を調べるに際して、佐呂間町議会議員千葉清美氏・佐呂間町立図書館職員越智正純氏から多大の協力を得た。記して感謝申し上げたい。

- (1) 栃木県史編さん委員会編『栃木県史』資料編・近現代九(栃木県、一九八〇年)「解説」三七頁。なお、足尾鉍毒事件に関する文献は数多い。研究書や概説書の類はさておいて、有益な資料集に限ってみても、内水護編『資料足尾鉍毒事件』(亜紀書房、一九七一年)、栃木県史編さん委員会編『栃木県史』資料編・近現代二(栃木県、一九七七年)、『栃木県史』資料編・近現代九、藤岡町史編さん委員会編『藤岡町史』資料編・谷中村(藤岡町、二〇〇一年)、足利市史編さん委員会編『近代足利市史』別巻・資料鉍毒(足利市、一九七六年)、佐野市史編さん委員会編『佐野市史』資料編三(佐野市、一九七六年)などがある。

- (2) なお、全国規模での世論について考えることも必要なことであろうが、谷中村の強制収用を行った当事者が栃木県当局であったことから、また足尾銅山の鉍毒と谷中村の命運に多大の関係を有するのは栃木県民であったということから、まず第一に考察されるべきは栃木県内の世論である。また、当時の県内世論をうかがう方法は他にもいくつか考えられるが、本稿ではとりあえず最も重要な方法である新聞を読むという作業を優先させた。他の方法も併用した考察は後の機会に譲りたい。

- (3) 『栃木県史』資料編・近現代九、「解説」四頁。

- (4) 例えば、政府は治水問題を理由に谷中村を遊水池としたのであるが、その後も洪水の被害は頻発しているし、足尾銅山の鉍毒も戦後に至つ

てなお一九五八（昭和三三）年に群馬県毛利田村に大きな被害をもたらしている。

- (5) 移民団に含まれる旧谷中村出身者の数は、この時点でのものは不明であるが、栃木部落史編集委員会編『栃木のあゆみ』（栃木開基開校七〇周年記念協賛会、一九八二年）所収の『栃木団体名簿』によれば、一九一一年の第一次・一九二三年の第二次を合わせた移住者のうち栃木部落に定住したのは八八戸、そのうち谷中村出身は一一戸で、部落全体の約五分の一を谷中村出身者が占めていたことになる。

- (6) 「梁田郡朝倉村地誌編輯材料取調書」『栃木県史』資料編・近現代九、四四九頁。「足尾鉾毒に就て渡良瀬川沿岸の士民に訴ふ」『栃木県史』資料編・近現代九、四五二～四五四頁。「吾妻村長からの上申書」『栃木県史』資料編・近現代九、四五四～四五六頁。「丹礬毒の義に付建議」『栃木県史』資料編・近現代九、四五六頁。「栃木県史」資料編・近現代九、四〇九～五一二頁。小山市史編さん委員会編『小山市史』通史編Ⅲ（小山市、一九八七年）五〇九～五一二頁。

- (7) この間に農商務省は介在していないとする説もある。

- (8) 『栃木県史』資料編・近現代九、「解説」四〇～四二頁。『小山市史』通史編Ⅲ、五〇九～五一二頁。

- (9) 『小山市史』通史編Ⅲ、五〇九～五一二頁。

- (10) この「鉾毒被害惨状悲歌」は鉾毒問題の意味、すなわち世界大國への道を邁進した日本近代化の（裏面）としての鉾毒問題という政治的事実が、当時すでに認識されていたことを示唆していると思われ、注目に値する。以下、その主要部分を掲げる。「そもそも今の大御世は／立憲君主政体で／天皇政治をみそなはし／輔弼参与の諸官あり／民は参政権を得て／堂々國是を論談し／英吉利亞米利加魯獨仏／世界有らゆる強國に／肩を列べて劣るなき／御世に生れし有難さ／思い較べてうらめしき／渡良瀬沿岸被害民／廿年余りの流毒に／関東一なる良田は／百年不毛と荒れ果て／多年穀草生ひ立たす／いよいよ其日もくらしかね／田畑は売らん／価値なく／窮余の果てに今ははや／子や弟の身をひさぎ／祖父母や親を介はうす／その悲しみは如何許り（後略）」佐野市史編さん委員会編『佐野市史』資料編三（佐野市、一九七六年）八三七～三八八頁。

- (11) 鎌倉亀久馬編著『栃木県の新開史』上巻（下野新聞社、一九五九年）一七八～一七九頁。

- (12) 「足尾銅山に関する鉾毒調査委員会報告書」『栃木県史』資料編・近現代九、九八八～一〇一七頁。野木町史編さん委員会編『野木町史』歴史編（野木町、一九八九年）六九五頁。

- (13) 「明治三十五年鉾毒調査委員会議事筆記（抄）」『栃木県史』資料編・近現代九、九四三～九八八頁。『野木町史』歴史編、六九六頁。『野木町史』歴史編、六九六頁。

- (14) 藤岡町史編さん委員会編『藤岡町史』資料編・谷中村（藤岡町、二〇〇一年）二頁。『小山市史』通史編Ⅲ、五一四～五一五頁。

- (15) 『野木町史』歴史編、六九六～七〇〇頁。『小山市史』通史編Ⅲ、五一四頁。

- (16) 「谷中村買収案審議」 栃木県史編さん委員会編『栃木県史』資料編・近現代二(栃木県、一九七七年)一六九～二〇七頁。手塚鼎一郎『栃木県政友会史』(立憲政友会栃木県支部、一九三五年)三六二～三六三頁。「元谷中村不当廉価買収の経過」『栃木県史』資料編・近現代九、一一一六～一二〇頁。『県会審議概況』『栃木県史』資料編・近現代二、一九六～二〇七頁。『野木町史』歴史編、七〇〇頁。『藤岡町史』資料編・谷中村、二七八頁。
- (17) 『藤岡町史』資料編・谷中村、二七九～二八〇頁。『栃木県史』資料編・近現代九「解説」七五頁。「所有物件買上に関する告示」『藤岡町史』資料編・谷中村、三〇三～三〇四頁。「谷中村廃村の告示」『藤岡町史』資料編・谷中村、三〇六頁。『藤岡・古河町民より岡田知事への陳情書』『栃木県史』資料編・近現代九、一一〇九～一一一四頁。なお、『藤岡・古河町民より岡田知事への陳情書』は、郡長らの誘導に応じて瀧水池設置事務員となり積極的に移住を夢見た旧村民の悔悟に満ちた回想である。
- (18) 荒畑『谷中村滅亡史』一六～一六二頁。「土地物件補償処分承諾取消の証明」・「土木吏横暴の証明」・「同その二」『藤岡町史』資料編・谷中村、三〇六～三〇八頁。『藤岡町史』資料編・谷中村、二二七頁。
- (19) 小池喜孝『谷中から来た人たち——足尾鉾毒移民と田中正造——』(新人物往来社、一九七二年)一一五頁。「旧谷中村を藤岡町より割き古河町に合併する請願書」『藤岡町史』資料編・谷中村、三〇八～三一〇頁。
- (20) 『下野新聞』明治四〇年六月二日付社説「谷中の強制立退」。
- (21) 荒畑『谷中村滅亡史』二九頁。また、谷中村廃村当時、谷中村に滞在して村民の側に立っていた菊池茂は「渡良瀬川の悲劇」と題する長詩を残しており、そこに「頃は明治の十三年 足尾の山を掘りしより 毒水出る渡良瀬川 魚は皆死し草枯るる……更に悲しや祖先を埋めし墓さへ魔の祟は 奪ふが如く買はん」とす 追ひ払はれて此等民 親の屍うちすてて 何地行かんかあ何処 芦原茫々三十里 風雪を吹く足尾の山 今日悲劇を何と見ん 毒流滔滔たり渡良瀬川 人皆あげて銅に 濁り了らんか噫日本国」とあるように鉾毒問題と谷中村廃村の關係が的確に把握されていた。
- (22) 木下尚江「序」荒畑『谷中村滅亡史』十一～十二頁。なお、木下尚江はこの「法治宗信徒」という言葉を、「谷中村の滅亡は法律的作用なり故に『法治主義』てふ善良なる偶像信徒の愚昧者流は谷中村の滅亡は気の毒なれどもやむをえざることなりと確信するものゝ如し。批評家の要務はその法律なるものがいかに運用せられたるかの実相を指摘してこの虐政を生み出したる人類意識の根本に正確の判決を与ふにありと存候。……小生は確信す、谷中村滅亡事件は法治宗信徒の惰眠の枕頭に投じたる天賜の爆裂弾なることを。」との文脈で使っている。
- (23) 『下野新聞』明治四〇年六月二日・二三日。
- (24) 『下野新聞』明治四〇年六月二八日。
- (25) 『下野新聞』明治四〇年六月二七日付社説「谷中の処分や如何」。

- (26) 『下野新聞』 明治四〇年六月二十九日。
- (27) 『下野新聞』 明治四〇年六月二十九・三十日。
- (28) 『下野新聞』 明治四〇年七月一日。
- (29) 『下野新聞』 明治四〇年七月四日。
- (30) 『下野新聞』 明治四〇年七月三日。
- (31) 『下野新聞』 明治四〇年六月三十日・七月一日。
- (32) 『下野新聞』 明治四〇年七月三・五日。
- (33) 『下野新聞』 明治四〇年七月四日。
- (34) 『下野新聞』 明治四〇年七月四日。
- (35) 『下野新聞』 明治四〇年七月十七・十八日。谷中村民の抵抗を、「懶惰の夢破れ」ないことと「一部政客の政治論」に騙されたことのみ
に帰する『下野新聞』議論は、「栃木県谷中村の例を見るも我国民は祖先伝来の墳墓地を去る痛く好まざるの習慣あり」ということを認識
していた内務官僚（内務省は谷中村に対する土地収用法適用を認定した所轄官庁）にさえ劣るものと言わざるを得ない。
- (36) 『下野新聞』 明治四〇年七月三・四日。
- (37) 『下野新聞』 明治四〇年七月二七日・八月二八日。
- (38) 『下野新聞』 明治四三年八月十二日。
- (39) 『下野新聞』 明治四三年八月十三日。
- (40) 『下野新聞』 明治四三年八月二八日。
- (41) 『下野新聞』 明治四四年三月十二日・四月三日・四月十八日。なお、谷中村の遊水池化が決定された時点で移転を決めた村民の中には、
一九〇五（明治三八）年五月に早くも北海道移住の希望を示した者もいたし、また第二次鉱毒調査会の報告書にも谷中村民の北海道移住に
ついて言及している付属文書が含まれているが、旧谷中村民の北海道移住が現実に具体化するの是一九一〇年夏の大水害後のことである。
参照、「団体移住についての契約に関する協定書」『藤岡町史』資料編・谷中村、三四一〜三四二頁。「被害民生業及び衛生状況に関する意
見書」『栃木県史』資料編・近現代史九、一〇一七〜一〇一九頁。
- (42) 『北海タイムス』 明治四三年九月八日。
- (43) 『北海タイムス』 明治四三年九月八日。
- (44) 『北海タイムス』 明治四三年九月九日。

(45) 『北海タイムス』明治四三年九月二七日。また『北海タイムス』は、明治四四年正月に懸賞論文の応募を行ったが、そのテーマは「如何にせば北海道移民を増加するを得べきか」であった。

(46) 『北海タイムス』明治四三年九月二八日。

(47) 『北海タイムス』明治四三年十一月二四日・十二月十八日。

(48) 『北海タイムス』明治四四年三月四・六日。なお、小池喜孝氏は渡辺常次について、渡辺の従弟菅沼英の遺族からの手紙にある「私の物心ついてからの彼は、極端な皇室中心の国家主義者であつたと思ひます」との証言を根拠に、「常治は自由民権から国家主義者へと変質した人である。すると、鉱毒事件援助のための『移民送り出し』ではない。……渡辺は極端なる皇室崇拜の国家主義者。谷中を敵視することでは人語に落ちまい」と、渡辺が国家主義の見地から谷中を敵視し、移民を送り出したとしているが、私は、この手紙から渡辺が国家主義の見地からのみ北海道移民を勧誘し、また谷中村を憎んでいたと考えるのは早計であると思う。本文において見たように、北海道移民の勧誘は渡辺に限らず『北海タイムス』社の方針であつた。ならば、『北海タイムス』社そのものが国家主義であつたのではないかとの疑問も生じうるが、この時期の『北海タイムス』は、例えば田中正造について「彼が輕拳暴動は、君子人自ら説あらんも、天下滔々輕佻にして浮薄、無主義にして無節操、唯だ一日の苟安を之れ事とするの時貧者弱者の味方となりて、財産を蕩尽し、生命を犠牲とする田中正造のあるあり、以て世上の珍とする処、狂と呼び、賊と呼ぶも、將た似非義人と呼ぶも玉となりて碎けよや熱血男児」と好意的に論じているし、また社会主義に対しても「馬鹿に付ける業は無い」と云ふ、真なるかな、我輩は、日本社会平民党の出現を以て治安に妨害ありとして、其の組織を禁止したる、現政府者の行動に見て、此の言の真なるを適切に感ぜずんばあらず。勢の成る猶ほ潮の来るが如し、人力の奈何ともなし能ふ所にあらず、社会主義の起るは、勢ひ也、……今日社会主義の起る、人心深奥の要求に依り社会大勢の趨向に迫り出されたるものなるに於て、官権の手や、法制の力やは、童だに之れを鎮圧し、之れを抑制するの效果無きのみならず、益其の勢を激成し、險惡なる結果を生ずるに至らん」と同時代の論評の水準から抜きん出て理解のある見方を示している。また、渡辺が単に谷中村を敵視して国家主義の見地からのみ北海道移民を勧誘したのであれば、移民団の一人今泉米次郎氏が回想する「北海タイムスの記者で渡辺常治という人がいた。私の故郷の寒川村の出身で、移住の世話をしてくれたと、父から聞いた。渡辺さんはこちらへ移つたあとも、札幌からよく来てくれた。移民二世を養子にもらつたこともあつた」といつたようなことが起こり得たであろうか。渡辺はそのころ北海道に暮らしていた多くの人々と同様に移民誘致の必要を痛感しており（移民誘致の必要は北海道庁や『北海タイムス』だけでなく、例えば札幌農学校本科学生の木村徳蔵が一九〇一年度の卒業論文に「北海道移民増減論」を著したように、当時の北海道民に広く共有された関心事であつた）、そうした北海道開拓のための必要性という見地から郷里での移民誘致を行っていたと考えるべきであろう。

(49) 『北海タイムス』明治四四年三月五・十九日。なお、一九〇六（明治三九）年八月以降、山梨団体の移住を先例として、北海道移住民で

「一時の出稼ぎ」でなく、「生業の目的」の者には内務省の指示に基いて汽車・汽船割引券が下付されることが慣例となっていた。

(50) 『北海タイムス』明治四四年三月二十六日。

(51) 『下野新聞』明治四四年四月三日。

(52) 小池「谷中から来た人たち」二二八～二三二頁。

(53) なお、この日の『下野新聞』は「北海移民を送る」と題する社説を掲げ、「下都賀郡南部一町六箇村の水害地窮民は、今朝小山駅を発して北海移民の途に就かんとす。住馴れし墳墓の地を去り親しき郷党に離れて、一念起生、茲に窮余の活路をたどらんとする一行の心情を察すれば、誰か慄然たらざるものぞ。……云ふ勿れ、事既に茲に至ると。……事茲に至る、花の咲くや散るの初め也、人の苦しむや楽しむの因たる云ふまでもなし。北海の地寒しと雖も亦異郷自ら見るべく楽しむべきものあらん。ただ当に行きて健闘せよ。汗の値は即ち富なり」と述べている。この「万感の思いを込めた」社説や、栃木部落の度重なる冷害に対して下野新聞社が救済物資を送ったことなどから同社が当初から北海道移民に対し同情的であったと見る向きもあるが（例えば鎌倉『栃木県の新聞史』や『下野新聞百年史』など）、我々は「事既に茲に至る」過程における、あるいは「住馴れし墳墓の地を去り親しき郷党に離れ」ることに抵抗する村民に対する『下野新聞』の論調を忘れてはならない。

(54) 『佐呂間町小史』四二頁。

(55) 『栃木のあゆみ』六八頁。

(56) 北海道庁「北見国網走郡下常呂サロマベツ殖民地増画図」（明治四三年、北海道立文書館所蔵）。

(57) 佐呂間町開基一〇〇年記念要覧『開拓四代 暮らしの歴史館』（北海道佐呂間町、発行年不明、非売品）九頁。『栃木のあゆみ』二一～二二頁。佐呂間町史編纂委員会編『佐呂間町史』（佐呂間町役場、一九六六年）三一五頁。

(58) 北見での歓迎ぶりを、明治四四年四月二一日付『北海タイムス』は「栃木県下都賀郡南部水害罹災民移住者六十七戸、二百十三人は……北見移住の目的を以て渡来せしが是れに對する本道一般官民の待遇頗る親切を極め彼等移住者亦其取扱の周到なるに寧ろ一驚を喫したる者の如し、今該移民に對する歓迎の盛況を報せん……野付牛村にては村會議員及び有志の協議会を開き左の事項を協議実行せり／▲栃木団体に対しては其通過する部落に於て荷物の運搬及老幼者の輸送は馬車を以て運送する事▲宿泊所に當りたる部落は適宜の方法を定め宿の割付をなす事▲宿の割付を受けたる者にて故障の為宿泊せしむる事態はさるものは其割当人員一人に付二十五錢委員に提供する事▲各部落は相當の委員を設ける事▲委員は野付牛村役場吏員の指揮に従ふ事／以上の規定を定め通過各部落にては茶菓の供応は勿論脚絆、草鞋、足袋等の贈与一般貨物無賃輸送等、同地方一般官民の誠意、宛も戦時軍隊通過の際に於て歓迎に異ならず移民歓迎上會て前例なき大盛況を極めたるが一行は去る十四日目的地たる常呂郡サロマベツ原野に着したりと云ふ」と報じている。

(59) 『佐呂間町史』三二五頁。峯崎辰蔵氏の証言は、岡田祐一『開拓時代の農村芸能——栃木歌舞伎の盛衰——』（一九八四年、非売品、北海道立図書館所蔵）五〇六頁。田中倫太郎氏の証言は、小池『谷中から来た人たち』一六六頁。

(60) 他県からの入植者は、栃木団体が国からの補助を受け、出発する前に入地する場所を知らされていたのとは違い、そのような特典はなかった。移住に要する費用や入地してからの諸経費はほとんどが個人負担だった。また開墾が五町歩に達していなければ入植者の賦与地はならないという条件も課せられていた。栃木団体の入植者の中には、土地を抵当に入れて生活・営農資金として多額の借財をしたが返済できずに土地を没収される者や、その他の事情で土地を離れていった者もいた。他県からの入植者には、こうした土地を買い取った人の小作人として、あるいは土地を放棄する人から個人的に払い下げを受け入地する場合が多かった。

(61) 『栃木のあゆみ』八〇九・一二〇・一四頁。

(62) 『佐呂間町史』一五九九・六七四・六七五頁。三浦喜四郎『栃木小学校の五十年を顧みての思い出』、『栃木小学校 開校五十年史』（一九六三年十一月二十日、佐呂間町立図書館所蔵）。

(63) 『栃木のあゆみ』十二頁。

(64) 小池『谷中から来た人たち』二二頁。栃木出身者のこの（騙された思い）は強く、それが二世に伝承されてさらに強化されている。例えば、川島清氏は、先の話に続けて、「来る時は、札幌の近くだと思っていたのに、『うるさい奴』だからと、遠くへやられ、ここへよこされたんだ。同じ列車で来た連中は道南の虻田に入ったのに、わしらはこんな遠くへ送られたんです」「なんせ、土地を強制収用されて移住した関係上、他の開拓部落とちがうんだという気持ちがある。そのため、あとからこの部落にはいった他県人と、そりが合わない。『あんまり昔のことを、いつまでも言うな』と言われた。しかしそう言われてもこの気持は直りはしない。機会さえあれば、何とか谷中へ帰るんだという気持ちがあるをはなれない」と述べ、同じく二世の今泉米次郎氏も、「三年前、川島さんといっしょに、母県へ行ってきました。秋山さんのように青年で来た人はなおさらでしょうが、自分らのように子どものころ来たものでも、故郷へ帰りたい気持は強いのです。父たちがどうしてあすこを捨てて来たのか、不思議でなりませんでした。谷中の堤防はりっぱになっていました。洪水の心配などまったく感じられません。帰りたいなあと思いました。今でも、私たちは帰りたいのです」と述べている（小池喜孝氏のインタビューによる、小池『谷中から来た人たち』一九〇・二七頁）。

(65) 「田中正造より富田村役場宛書簡（明治三四年）」『近代足利市史』別巻史料鉅毒、三七二頁。